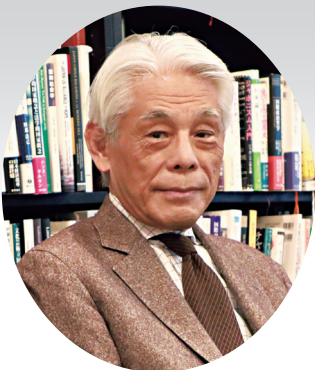


第二次世界大戦終結より80年。戦争を直接体験した世代が少なくなるなか、いまだ不穏な時代は続き、世界各所での紛争や軍事衝突が絶えることはない。このような現代において文化芸術の果たすべき役割といかなるものなのか？元文化庁長官であり現在近藤文化・外交研究所代表を務める近藤誠一氏に特別寄稿を寄せて頂いた。

—戦後80年の今を見つめて— 文化芸術の力を再考する

◆特別寄稿◆



こんどう・せいいち

1946年神奈川県生まれ。東京大学教養学科卒。元文化庁長官。パリOECD（経済協力開発機構）事務次長、駐米国大使館公使、ユネスコ日本政府代表部大使等を歴任。退官後、東京大学、慶應義塾大学等で教鞭を執った他、東京藝術大学客員教授を務める等文化・芸術の発展、国際交流に貢献し、瑞宝重光章、フランス国レジオン・ドヌール・シュバリエ章を受章。現在近藤文化・外交研究所代表、国際ファッション専門職大学学長。

欲望は進化するどころか、最新のテクノロジーを利用して果てしなく拡大し、それが愚行を生んでいる。民主主義という美しい理念体系をつくった理性も、感情をコントロールできない。禁断の木の実を食べると人間は「死ぬであろう」との神の予言は実現するかも知れない。国連ができた1945年、それを予見したひとたちがいた。ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の創始者だ。ユネスコ憲章には次のような下りがある。

政治的・経済的合意は、加盟国の利害が一致するときには機能しないのだ。だからユネスコの創始者たちは、文化や教育における強い連帯の仕組みをつくることを提唱した。これは人類の長い歴史を振り返れば当たり前のことであることに気づく。700万年前に生まれた人類は、草原で肉食獣の攻撃や食料不足により生き残ることは困難だった。しかしゴリラと違って家族単位を超えて、群れの規模を拡大することで生き残ることができた。そしてその力となったのが文化芸術だ。言葉を発明する前から、美術や祭りによ

（近藤文化・外交研究所代表）

人類は古来争いを繰り返しながら、「平和」を望んで来た。そして80年前、戦争を完全に禁止する国際連合ができたとき、誰もがついに理性の力によって戦争はこの地球上から消え、永遠の平和がくると信じた。しかし今の世界は、国連が想定していたものとは程遠い。人類は神に禁じられた木の実を食べて得た「知恵」によって道具や言葉、テクノロジーを発明し、高度な文明を築いたが、それらは大きなマイナスの結果をもたらしている。自然の生態系の破壊、自らの社会の分断と殺し合い……。

平和はいつ来るのか？

近藤誠一

政治的・経済的合意は、加盟国の利害が一致するときには機能しないのだ。だからユネスコの創始者たちは、文化や教育における強い連帯の仕組みをつくることを提唱した。これは人類の長い歴史を振り返れば当たり前のことであることに気づく。700万年前に生まれた人類は、草原で肉食獣の攻撃や食料不足により生き残ることは困難だった。しかしゴリラと違って家族単位を超えて、群れの規模を拡大することで生き残ることができた。そしてその力となったのが文化芸術だ。言葉を発明する前から、美術や祭りによ

てお互いを知り、共感力と連帯力を育んだのだ。これは現代にも通じる人類の普遍的な力だ。政治や経済が目の利害に左右されて揺れ動くとき、言葉や国境を越えて、美という共通の価値を掲げてこのところをつなげる文化芸術の力は、いままで以上に重要になる。

文化芸術は一部のひとたちの趣味や娯楽ではない。自分が人間であり、自然の一部であること、そしてそれら環境や文化を超えてすべてのひとを



第8回横浜トリエンナーレ「野草：いま、ここで生きている」プレス内覧会出席者
撮影：加藤甫